# 雪

A Happy New Year !

www.columnland.net

# 初雪

雪が降ってきた。

その日は朝から冷え込んでいた。予報は冷たい雨になると伝えていた。しかし私は、なんとなく雪になることを予想していた。

暖冬のため今年は見ることができないと思っていた、雪。
同時に悟った。これが自分の人生の中で最後の雪になるということを。

昔から雪は好きだった。朝起きてカーテンを開けたときのあの興奮。ただ、いつもと変わらない街にたった数センチの氷が積もっただけなのに。
友達と作った雪だるま。雪合戦。
雪が水っぽくて雪玉が顔に当たると本当に痛かったな、なんて。

病室から見る雪は、昔と同じ興奮を届けてくれた。そして同時にはかなさを感じた。

地面がまだ暖かいのだろうか。ヒラヒラと舞う雪は地面に落ちては融けて消えてしまう。
一向に積もる気配はない。

「私の人生は…」そんな言葉が頭をよぎり、寂しさに襲われる。

都会の雪は初めから積もることはない。充分に地面が冷えてから積もっていく。はかなく融けて消えていってしまった雪も決して無意味な存在ではない。あとから降ってくる雪のために地面を冷やすのだ。
例え自分の人生が短く、他人から見て哀れなものであったとしてもそれはそれでいい。
自分が生きてきた意味、そして充実感を感じることができた気がした。

結局、雪は積もることなく日が暮れる頃には止んでしまった。
しかし私はそっと微笑んで、少し休むことにした。

「雪だー。」
妹の歓声で目が覚めた。眼鏡を通さないで見た窓の外は、真っ白だった。今年も降ったか。寝返りを打ちながら思い出す。数年前の、一面雪で覆われた公園での告白を。

白い告白

「佐藤、あいつに告白して振られたみたいよ。」
お前は愉快そうに笑う。
「あいつのこと好きなのって、佐藤だったのか。」
ため息交じりに俺は呟く。ライバル一人脱落。
「でも、まだ他に一人いるんだろ、ライバル。」
あいつの友人、そして俺の相談相手のお前は、俺のぼやきに微笑む。
「ああ、多分あれはもう大丈夫だよ。」
お前はポリシーだとか言って、ライバルの正体は明かさない。
「あれのことも一応分かってるつもりだからな、安心しろ。」
道端に転がった蝉を見ながら、お前は呟いた。

「先週はありがとな、おかげで仲良くなれたよ。」
あいつと二人で会う機会を作ってくれたお前に感謝を告げる。
「随分と仲良くなれたよな、お前らも。」
ふとした言い回しが、俺は気になった。
『も』ってことは、例のライバルもなのか？」
お前は苦笑いしながら尋ね返した。
「はは、そんなに気になるか？」
俺が真面目に頷くと、お前は空を見て言った。
「そうだな、じゃあ、雪でも降ったら教えるよ。」
乾いた秋の空には、雲ひとつなかった。

「大崎君も佐々木さんと随分仲いいよね。」
お前と奇妙な賭けをした数日後、何気ない会話であいつのことが出てきた。
「ああ、大石が仲介してくれてさ。」
少し照れながら俺は答えた。
「あれ、でも大石君も佐々木さんのこと好きなんじゃないの？」
その一言で、全てが繋がった気がした。お前の名前がライバルとして出てくるなんて、考えもしなかった。でも言われてみると、考えれば考えるほどそう思えてきた。
ニュースでは、今年は雪が降ると伝えていた。

「お前なんじゃないか、ライバルって。」
真っ白になった公園で、お前に問いかけた。
「…そうだよ、よくわかったね。」
白い息を吐きながら、お前が答える。
「そうか、やっぱりお前だったのか。」
脱力して、俺は空を見上げる。
「でもね、勘違いしないでほしいんだ。」
お前はおもむろに立ち上がると、微笑みながらもう一言呟いて去っていった。
「俺はあいつが好きだから、だからこそお前と一緒になってほしいんだ。」
お前が去った後の公園に、きょとんとした顔のあいつがやってきた。

あの日からもう数年経った。俺たちは同じ学校を卒業し、ばらばらの進路へと進んだ。でも、あの日の俺たちにこんな結末が訪れるなんて、誰が想像しただろうか。
雪の積もった道に踏み出しながら、俺は言う。
「じゃあ、佐々木と大石と飲んで来るわ。」

3m

# 銀の惑星

西暦2xxx年、地上では核戦争が起きた
生き残ったわずかな人類は、いくつかの巨大シェルターを地下に作り、太陽を見る事の無い生活をする事になる
地上に残留した放射能が消えるまで二百年
定員の関係で入る事のできなかった人々の怨嗟の声を後に、仄暗い地底で人類は待ち続けている

一人死に、二人死に、一人生まれ、二人生まれ、すぐに地上を知るものなど消えてしまった。彼らはじっと耐え、二百年というその長い年月が過ぎるのを待ち続けた
そして二百年後、蒼い空と青い海、白い雲に緑の大地、そして黄金の太陽を求めて地下の人類は行動を開始する

それはすでにおとぎ話である。地底には地上を知るものなどいるはずも無く、子供の頃に聞いた親の話を聞いて各々の想像を膨らませていた
空想は崇拝を呼び、地上へ出る日が近くなると自然崇拝の新興宗教が次から次へと産声をあげ、その流れがますます光を取り戻したいという雰囲気を作り上げていく

もしかすると光を取り戻すというそれ自体が人間の深いところに刻まれた本能を刺激したのかもしれない。太陽の下で進化し、太陽を崇拝し、太陽にすがって生きて来た人類が、太陽を二百年の間失うと誰が想像しただろう。想像したとしてもひどく茫洋としていて明確なイメージなど作り出せるものはいないはずだ。あって当たり前と化してしまった奇跡に気づかなかった代償が、この惨劇を生んだのではないだろうか

そして、とうとうシェルターを出て地表に出る時が来た。代表の数十名がシェルター出口に集合し、外が安全であるか確認する。放射能は問題無しと出た。人々は自身の祖先が月に降りる宇宙船を注視したのと同じような感覚で、故郷を見るために画面と顔を合わせていた。一人の例外も無く、その日の配信映像の視聴率は百%だった

しかし、その映像が入って来た瞬間人々は呆然とした

知識としては知っている。だが、ここはそれなりに暖かく、これがある事など聞いた事が無い
地上は、大吹雪。全ての生命が存在する事を許さない、死の世界だった
画面を見ていた人間は呆然とその映像を見ていた。かくも地上は人に厳しい。穢しつくした代償に、太陽はそっぽを向き、大地は顔を覆ってしまった
ネタバレをしてしまうと簡単だ。核兵器は地球の位置までも変えてしまったというだけの話。だが、地下の人間はそれで済ませる事などできない
暴動が起きた

混乱の末、ただでさえ少ない人間はさらに数を減らし、なんとか地下は平和を取り戻した。希望という代償を伴ったが、とにかく次世代につなぐ事ができた
次世代の子供達はこの事実を知らない。これから彼らは一部の人間だけが支配階級として事実を知り、あとの人間達には希望が残る代わりに被支配階級として生きる事になる

彼らは地上という希望を抱いて、地下という牢獄で死んでいく

# 真夏の深雪

朝起きると　雪が降っていた

目の前で　降っていた
部屋の中で　降っていた
こんなこと　初めてだ

視界にほんの二　三粒だけど　確かに降っている
降っているのはここだけだろうか　そう思って　外に出てみる

外でも降っていた
太陽が輝く下で　降っていた
確か　故郷の方では　狸の嫁入りというらしい
ここらではなんというのだろうか
ぼんやりと　眺めながら過ごす

雪は　日を重ねるごとに　少しずつ強くなっていった

だんだん　辺りに雪が積もってきて　そこでようやく思い出す
今は真夏のはずなのに
だんだん　気づいてくる
これは雪じゃない
目の前に降っているものは　まるで　壊れていく世界の断片のような　無機質な白い屑
幻想の欠片すら感じさせない　逆に虚無感に苛まれる

そんなものが　あたり一面に積もってゆく
いつしか視界全体を覆うほど　積もっていった
世界の終わりを感じる
この世界が終わったら　私はどうなるのだろう？

次に目覚めても　私は終わった世界にいた
どの方向も真っ白で　何もない
――目が覚めたのかい？
声が聞こえる　でも　その方向には誰もいない
――白内障だよ　随分と珍しい種類だけどね
――若いのに大変だったね　でも大丈夫　今はもう手術で治るからね
やっとわかった　世界はまだ　終わっていなかった
その瞬間　ふっと力が抜けて

次に目覚めたとき　雪は止んでいた

もうすぐ　本当の雪が降る

# 初雪

寒気を感じ私は目を覚ました。寝ぼけ眼で欠伸をする。おかしい、昨日はこんなには寒くなかったはずだ。いつものフローリングの床も今日は冷たくて寝そべることもできない。でも私は考えるのが嫌いなのでとりあえずあさごはんを食べにいくことにした。

ふう、おなかいっぱいだ。でも寒さはやわらがない。おかしいなあ。太郎で遊んだら暖かくなるかなあ。

太郎がいない……どこにいるんだろう。いつものソファにいないとなると……。

その時、外から太郎の声が聞こえてきた。カーテンをくぐって窓から外を見ると、太郎が白い綿のようなものの上で跳ね回っている。何だあれは？なんだっけ？なんだか嫌なものだった覚えがあるぞ。あっそうだ、あれはすごい冷たいんだ。前知らずに飛び込んだときは死ぬ思いをしたんだ。あんなものの上で跳ね回るなんて、太郎はなんて変なやつなんだろう。ふぁ、それにしても眠い。寒いし眠いしつまんない、もう一眠りするか……。太郎は眠くないのかなあ、こんなに寒いのに……。もう……駄目、コタツ入ろう……。

ゆーきやこんこ

6m

# 大惨事雪界対戦

「えー、これよりチーム新潟とチーム北海道による自衛隊内対抗雪合戦決勝を行います。試合は、生放送で『全国に伝えられます。範囲はこの山一帯。雪を用いた武器なら何を使用しても構いません。全滅した方の負けです。では、一時間後にはじめます。各チーム、陣に戻ってください。」

雪崩を起こしかねないほどの両軍の掛け声の後、私は新潟の兵器のセッティングにかかった。去年の雪辱を晴らすべく、とっておきのものをもってきたのだ。

戦闘開始。山の中で早速先発隊同士がぶつかっている。茂みに隠れて雪玉を抱えるスナイパー、スノーモービルでかく乱するものもいた。前線の様子は無線機を通して伝えられていた。

―こちらチームアルファ、敵狙撃部隊発見、援護を要請する―

待ってました、といわんばかりに、兵器をおおっていたカバーを外した。白銀の上にくろがねの機械が三つ登場した。古代の投石器をモチーフにした投雪器である。部下に命令をする。

「目標二時五十分の方向、距離五七九．三M、…放て！」

雪玉の空気を切る音が響き渡る。そして、十数秒後、バキバキと木が折れる音と、敵軍の悲鳴がした。その声を聞いて私は微笑を浮かべた。

「どんどん位置を教えてください。木ごと敵軍の士気を折ってやりますよ。ふふ…。」

二発目、三発目と次々に発射して、山中で待ち伏せしていた敵軍が総崩れになった。だが、妙である、あのチームが何の兵器を作らずに試合に臨むわけがない。

やはり、というべきか、突如、無線から緊急連絡が来た。

―た、大変だ、敵は雪玉をスナイパーキャノンに装てんして攻撃して…至急…キィィィンぐぉ！―

この距離では投雪器の射程外で、援護ができない。

「仕方がない、あれを使うべき時のようだな…。…私を本気にさせたことを心の底から後悔させてやる…。」

部下に無線で連絡をとり、私はスノーモービルである場所へと向かった。戦闘区域ギリギリのこの地点に、今はもう使われなくなった線路があり、巨大列車がとまっていた。

「あっ、隊長、メンテナンスは完璧ですよ。いつでも発射可能です。」

「よし、目標三時十分三五秒の方向、距離一七九八．四M。風速、温度による修正を確認…やれ。」

熱で溶けないよう特殊なコーティングをされた雪玉が列車砲の砲身から轟音をたてて打ち出された。その反動で、列車砲は三M程後退した。打った瞬間から目標への直撃は決まっている。

五十秒後、味方から無線が入った。笑いを浮かべながら無線の声を聞く

―敵の砲台に直撃確認、スナイパーキャノン沈黙、これより敵本陣に攻めかかる―

「私を怒らせたからだ。せっかくの兵器は、また一から作り直してくれたまえ、はっはっは…。」

しかし、敵はまだ諦めていなかった。攻撃機A―一〇を持ち出して、雪玉で爆撃してきたのだ。だが、こんなこともあろうかと、友人の友人からちょっと借りた戦術爆撃機B―二をもってきているのだ。すべては私の予定通りである。

（こうして、全国ネットで攻撃機と爆撃機、列車砲、投雪器、スナイパーキャノンを用いた雪合戦が映し出された。どちらのチームも後日、各方面から大目玉を食らったのは言うまでもない。その時の視線は南極の雪よりも冷たかったそうだ。）

# 不運な男

いつもいつも不運な俺だが、今日は特に最悪だ。

この辺には珍しく大雪が降った今朝、スリップした車がこちらに突っ込んで来た。なんとか避けたものの、その拍子に脚を打ち付けロクに歩けたもんじゃない。避けたのを見て車は逃げるし、会社には遅刻確定だ。

遅刻。みっともなくも涙が溢れてくる。不況の影響で社内のリストラ気配濃厚な今、遅刻なぞは格好の的にされる。この時勢、この歳でもしリストラなんか食らったら、復職なんてできるものか。靴の中をぐちゃぐちゃに濡らして、足を引きずり駅に向かう。クソ、全部雪のせいだ。

俺は人生で一番雪を恨んだ。が、駅に着いて人生で一番雪に感謝する事になる。電光掲示板の赤い文字。『大雪のため運行に遅れが出ております。』

助かった。本当に助かった。上司に連絡を入れ、ホームに上がる。不運な俺らしく目の前で電車が行ってしまったが、もう急ぐ必要は無いのだ。むしろ乗り場の最前列に並べる分、車内で座りやすくなるという幸運。

ホームの中には瞬く間に人が増え、それを飲み込む次の電車が見えて来る。ダイヤの回復運転なのか、徐行どころか普段より速度を上げている。まったく安全性は大丈夫なのかと、ぼやける余裕に感謝する。

**「一時間の遅延じゃ足りない、どうしても足りないんです。ごめんなさい。」**

突然列の後ろの男が、俺だけに聞こえるほど小さく呟く。何の事だと振り向こうとした刹那、ドン、と背中を押され俺はホームから転げ落ちる。何が起きたのかを理解する前に、目前に車輪が迫る。

―只今、津所駅で発生いたしました人身事故により、更なる運行の遅れが生じております。お待ちのお客様方に、重ねてお詫びを申し上げます―

8m

# 雪肌

君はあまりに綺麗だから
触れ合うことが躊躇われるよ
僕に汚されないでいて

君はあまりに綺麗だから
めちゃくちゃにしてやりたくもなるよ
僕のあとを残しておいて

だけど君はじきに
僕の前から消え失せる

それまでに決めるさ
見守るか
汚すかを

# シベリアの大地

あごに鬚をたくわえた白髪の老人――利幸は、家の縁側から庭をながめた。自慢の松が適度に手入れしてある庭には、今年も東京の初雪がささやかに降っては消えてゆく。利幸は目を閉じ、遙か北の雪の大地、シベリアに思いを馳せる。

＊　＊

利幸は六十余年前、まだ戦争が終わって間もないころ、北の戦地、樺太にいた。日本とソ連の間で和平交渉が進み、ソ連から邦人を日本本国に帰すとの達しがあったのだが、いざ利幸たち邦人が連行されたのが零下二〇度の極寒の大地、シベリアであった。いわゆる、シベリア抑留である。

シベリアに連行された邦人は、極寒の大地で人を人と思わないような労役を強いられた。息をするたびに口の中が凍りつく。吹雪で頬が凍傷になる。そんな寒さの中で、一面白の大地にひたすら穴を掘り、柱を建てる。毎日の食料は黒パンがひとかたまりと、脱脂粉乳がつくくらいのものであった。

愛する祖国のためではなく、憎き敵国に服従させられ、奴隷のような扱いを受ける日々。そんな生活の中で、皆飢え、凍え、利幸は親友の食料を盗み食うまでに堕ちていった。生きて祖国に帰る。それが利幸に残った最後の誇りだった。

ある夜、利幸がふと目を覚ますと、隣の寝具から声が聞こえた。

――ここは、日本なんですね。――

ポツリポツリと、その声は穏やかに言った。

――私はやっと、帰ってきたんですね。――

――…お母さん……！！

そう小さく叫ぶと、声の主はその熱を無くしていった。命の灯火が、また消えた。

＊　＊

利幸はふと目を開けた。妻の声がする。茶でも入ったのであろう。

後に利幸が帰国したのはシベリアに連行されてから七年後であった。多くの邦人が帰らぬ人となり、利幸は凍傷で左手の指を三本失った。

相変わらず今年の初雪は積もることなく消えてゆく。あの地獄のようなシベリアの雪とくらべたら、なんと暖かいことだろう。人は寒さと悲しみばかりの場所では生きて行けぬ。この国の暖かな未来を願いながら、利幸は初雪の降る空を、一度ゆっくりと仰ぎ見た。

# 氷雪義士物語

雪の中、無機質な響きが、秩序をもって小屋を支配していた。鉄の響きは熱気に吸い込まれ、湿気、雪に加え、小屋の空気を重く、厚いものとしていた。

小屋の中では、若い侍と老いた刀匠、二人が休む間もなく鎚を振るっていた。その身からは汗がほとばしり、額を流れる汗は顔の煤を洗い流していく。水滴は黒く濁り、地に落ちた。

その時、鎚を振るう侍を、刀匠が制した。刀匠は鍛え抜かれた鋼へと、一杯の水を打つ。小屋中へと広がる水蒸気に構わず、刀身を水桶へと静かに浸けた。水から出し、刃の汚れを拭った時、一振りの刀がその姿を現した。刀身はなだらかな弧を描き、雲を張ったような鈍い輝きをたたえていた。

「上々じゃ」刀匠は呟く。その顔は顰められていたが、声には微かな満足が響いていた。「始めてより半日が経つか。おぬしも、ようやった」

「いえ、ご老体こそ、この度は拙者のために、無償にてご尽力いただき、ご迷惑をおかけしました」その身に汗を浮かべながら、侍は疲れを表わさず、慇懃に答えた。「誠に、有り難く存じます」

「礼には及ばぬ。刀匠は打つ。それが仕事じゃ」老職人はそこで、皮肉な笑みを浮かべる。「刀は斬る。だが、侍はなんじゃろうな」

「侍は、義を貫くものでございます」侍はそう言い、その日は刀匠のもとを後にした。

後日。刀匠は雪の中、侍を出迎えた。その手には、出来たばかりの刀があった。

刀匠は問うた。「おぬしが何をやるかは知らぬ。が、わしのような者を訪ねてくるとあっては、正規の事ではあるまい、罪を得る事じゃろう。訊くが、おぬしは自分のやることが義であると言えるか」

「侍は義をなすものではありませぬ。貫くものでございます」

「詭弁じゃ。この刀はおぬしを罪に落すためには使えぬ」侍はかぶりを振る。「確かに、拙者はこの刀で人を斬り、罪を得ることとなりましょう。それは覚悟の上です」

「それのどこに義がある」「この刀が、貫くものの先にこそ」

義とは、行動そのものではなく、その心は、生き様にございます。侍はそう言って口を結ぶ。「若いな」刀匠は笑った。「だが」それは隠す事無き、満足の笑みだった。「それでこそ」

刀を差し出す。刀を抜いた時、侍は息を呑んだ。その刀身は冷たく、凍てつかせるかの如く輝いていた。が、その刀身を鞘に戻す際、侍は絶句した。刀身の根には銘があった。「越前幸光作」

「これは…！」漸く声を出す。侍はこれから罪を得ることになる。それを知って、手助けしたとあっては刀匠も同様の罪を得る事となりかねない。その罪の証拠となる銘を彫るなど—

「わしも懸けたのだ。おぬしの生きざまとやらにな」

侍はそれを聞き、深く一礼し、去った。振り返ることなく、その姿は雪道を消えて行った。

その年の暮れ、先だって藩の取り潰しにより浪人の身となった四十七人の侍が、亡き君主の仇の屋敷へと討ち入った。雪の夜の事だった。その中の一人、朝岡重太郎は、それに際して仇の家臣三人を斬った。彼の刀は刃毀れも起さず、氷の如き輝きを浮かべていたという。彼らは仇を討った後、従容として死地に赴いた。処分は切腹—重太郎らは武士の礼儀として、その愛刀にて介錯を受けた。

最期に重太郎は、雪の中、刀匠と共に鎚を振るった日の事を思い出していた。あの老人に、改めて礼を言わねばなるまい。そう思い、重太郎は眼を閉じた。その日は晴天で、北の空がよく見えた。

# 曙光と煙草

目が覚めて、携帯で時刻を確認した
午前六時十二分
窓がうっすらと蒼くなっているのがわかる
予報では雪が降るはずだったけど、そんな気配は少しもない

コタツから出て周りを見ると、部室には俺と朋也しか残ってなかった
「朋也、起きろよ、そろそろいかないと間に合わなくなるぞ」
肩を揺すってみたが起きそうにない、きっと幸せな初夢をみているんだろう
「俺はもう行くからな、後で文句言っても知らねえからな」

聖橋は初日の出を待つ人たちで埋まっていた
なかには三脚をたててカメラの用意をしている人もいる
キャンパスから歩いてすぐ着くので、部室や研究室で年を越した
明大生たちは毎年ここで初日の出を拝もうとする

「お～い、シュン、今年は間に合ったな」
橋の手前の方で先輩が待っていた
「去年は朋也が飲み過ぎたせいで見に行けなかったんですよ、今年は
　ぐっすり眠ってくれたおかげでなんとか来れましたけど」
部室にコタツを入れて良かったなと初めて思った

煙草を吸いながら初日の出をぼんやりと眺めていると
朝焼けの中に人工衛星がゆっくりと西の空に消えていくのが
見えた、それに気づいたのはあの橋の上では俺だけだったらしい
その静かな軌跡がずっと頭から離れなかった

雪女

あるところに**雪女**がいましたが、寒いのが苦手だったので冬になると親に**絶対に覗くな**と言って部屋にこもってばかりいましたが、ある日ふと先日雪男友達から頂いた**きび団子**を一気に食べ、食後の運動にとかねてから騒音の迷惑を被っていたお隣の**鬼たち**の**舌を切って**やろうと近所の**栗**さん**蜂**さん**臼**さんと共に鬼の部屋へ乗り込むと、鬼たちは**ウサギとカメ**を競争させるという賭博まがいの遊びをしていたので即通報、**犬っぽいお巡りさん**に補導されました後、無事に保護された**カメは御礼がしたい**と言い出し、栗さんに**ビビデバビデブー**と魔法をかけるとこれが大きな**馬車**に変身、舞踏会に向かうことになりましたが、馬車は途中**お客様のお荷物が扉に挟まる**というトラブルのため大幅に遅延し夜遅くなって会場に到着しましたが、王子は肉食系の雪女が気に入らなかったのか**十二時の鐘**が鳴ると同時に一本の**わらしべ**を彼女に向かって投げつけて去ってしまったのですが、彼女は**マントでひらり**とかわしたため、わらがコロコロと坂を転がって**お池にはまって**しまうと、水中から**根元の光る竹**が豪快に出現し、落としたのはこの**鋭利な刃物**なのかそれとも**鋭利でない刃物**なのかと声がするので竹をバールのようなものでこじ開けると中には身長**一寸**ほどの**マサカリ**を担いだ下品な男の子が座っていたので刃物を振り回してはいけないと延々説教をし、**月に帰る**よう説得して帰らせたその夕方、雪女は林道の**地蔵**が寒そうにこちらを見ていたのを無視して通過し、一匹の**狼**が**レンガ造り**の民家の前であらぬことをしていたのを発見し**毒リンゴ**で退治すると、立てこもっていた**101匹**の**子豚**と**赤い頭巾**を被った少女、加えて**顔にコブ**がついたおじいさんが出てきて、御礼にと言われた場所を**掘ってみる**と**虎の絵**が描かれた屏風が出てきて**新年明けましておめでとうございます。**

## コンテスト結果

| コラム番号 | コラムタイトル | 点数 | 順位 | 特別賞 |
|---|---|---|---|---|
| | | まじょコメント | | |
| 01 | 初雪 | 2 pt | 7 位 | 0 sp |
| | | 人生の終わりにさしかかって、降る雪に自分の生きてきた軌跡をさりげなく重ね合わせてみる。<br>気負いも力みもない、ふうわりした語り口が、まさに雪を体現しているような、しっとりした今年の読み初め表紙でした。 | | |
| 02 | 白い告白 | 0 pt | 11 位 | 0 sp |
| | | TAさんが、しらじらしい告白、とか呟いていたのはナイショです。<br>雪の公園の静けさのなかでの青春模様。展開はシンプルで分かりやすいのですが、ラストの「こんな結末」って？<br>なんと、みんなの期待を釘付けにして、じつは現在進行中のお話なんだそうな。ほおぉ。<br>特別賞：結局どうなったんで賞か？ from ましろ色シンフォニー班（この先の展開は誠死ね的になるかも） | | |
| 03 | 銀の惑星 | 7 pt | 2 位 | 0 sp |
| | | 待ち続けているほうが、まだしも幸せなんて。<br>人類を奈落の底に突き落とした、なかなかに毒のまわったストーリーです。ぶあついストーリーを届けた末の、ラスト１行のシニカルさがとても印象的。<br>温暖化回避のための、地球寒冷化提案だったとか。おめでとうブロンズ・メダル！<br>イチオシフレーズ：「彼らは地上という希望を抱いて、地下という牢獄で死んでいく」 | | |
| 04 | 真夏の深雪 | 1 pt | 8 位 | 0 sp |
| | | この題材の選び方のユニークさにブラボー！<br>ふと襲ってくる恐怖が、緻密な描写でとてもリアルに迫ってきます。しっかり取材した労力が生きてますね。<br>それにしても、治って良かった。でないと、ホラーになっちゃう。 | | |
| 05 | 初雪 | 1 pt | 8 位 | 0 sp |
| | | なるほど、猫視線では雪はちっともうれしくないのね、という視点の切り替えが新鮮でした。<br>せっかくなので、トークももっと猫っぽさ希望☆ | | |
| 06 | 大惨事雪界対戦 | 4 pt | 4 位 | 2 sp |
| | | 次回先取りミリタリーもの。楽しんで書いているようすがひしひし伝わってきます。タイトルも決まって会心作？<br>でも、せっかく北海道と新潟に分けたなら、ご当地ネタも欲しかったなあ。<br>特別賞：うまいで賞 from 上野駅班（うまい！） 題名が秀逸賞 from 謹賀新年班<br>イチオシフレーズ：「大惨事雪界対戦」 | | |
| | | 7 pt | 2 位 | 0 sp |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 07 | 不運な男 | 雪をめぐる幸運と不運の上がり下がり。あざやかなストーリー構成です。<br>特に「一時間の遅延じゃ足りない」のセリフが、しっかりホラーしてて耳に残ります。<br>そこがしっかりみんなのツボに入って、雪にふさわしいシルバーメダルでした、おめでとう!!<br>イチオシフレーズ：「一時間の遅延じゃ足りない、どうしても足りないんです。ごめんなさい」×3 | | |
| 08 | 雪肌 | 1 pt | 8 位 | 3 sp |
| | | アイディア賞。そして、エロティカル。<br>すーっと滑降してゆきたくなる思いを、あるいはめちゃくちゃに踏みつけたくなる衝動を、うまく比喩に託していただきました。<br>作者さんトークもなかなかに聞かせましたね。<br>ユニークさをしっかりアピールしての最多特別賞です。おめでとう☆<br>特別賞：一緒にすべりま賞 from Uzee班（レイアウトがスキー→スキーですべる レイアウト関係ない→この賞がすべる） 深いんで賞 from sNow班（時代を先駆けています） レイアウトがいいで賞 from ProjectX班（これだけ、レイアウトがコッテるから）<br>イチオシフレーズ：「めちゃくちゃにしてやりたくもなるよ」 | | |
| 09 | シベリアの大地 | 3 pt | 6 位 | 0 sp |
| | | シベリア抑留の重たい歴史をさっくり掘り起こして。<br>たんたんと過去を語るというスタンスが、誰かを責めたり、あるいは自虐に落ちたりせずに、未来への希望を感じさせて好印象です。<br>このことをみんなに伝えたいんだ、という作者さんの気持ちがしっかりこもってました。 | | |
| 10 | 氷雪義士物語 | 4 pt | 4 位 | 2 sp |
| | | 刀を打つ描写が金属工学科のTAさんのツボだったようなのですが、フロアのみなさまのツッコミドコロにもなってましたね。<br>緻密な構成をくっきり義で貫いて、まさに時代劇の荘重さです。<br>なまじ赤穂浪士にリンクしないほうが、よりオリジナリティが際立ったのではと思うのですが、どうでしょ？<br>特別賞：いきなり冷やしちゃいけないで賞 from Syogatu班（刀が刀らしくならないそうです） 素人が手を出していいんで賞か from 霜班（若い侍と老いた刀匠） | | |
| 11 | 曙光と煙草 | 0 pt | 11 位 | 0 sp |
| | | お茶の水界隈青春グラフィティ、といったところでしょうか。友だち置いて来ちゃったシュンはちとひどいかなと思ったら、先輩も同罪だったり？<br>人工衛星のくだりがとても印象的なので、そこにもっとフォーカスしたい。 | | |
| | | 24 pt | 1 位 | 2 sp |
| | | おとぎ話のネタ詰め合わせセット。ぎっしりでお得感。とてもおめでたくおさまった今週の裏表紙でした。 | | |

| | | |
|---|---|---|
| 12 | 雪女 | もうどの班でも、ネタ探しトークで、話題ひとりじめの圧勝首位でしたね。イチオシフレーズ大賞もおまけに付いて、年の初めの光り輝くゴールドメダル、おめでとう!!!<br>特別賞：Chaos賞 from 雪班（みんなピュアな作品書きたがる中、よくがんばった。よくやってくれた） 田都じゃしょうがない賞 from SchneiZ班（田都パネェ）<br>イチオシフレーズ：「ウサギとカメを競争させるという賭博まがいの遊び」 「１０１匹の子豚」 「新年明けましておめでとうございます」 ×２ |